

平成 28 年度第 1 回ちば文化振興懇談会 開催結果概要

1 日時 平成 28 年 9 月 6 日（火）午後 2 時～午後 4 時 30 分

2 場所 千葉県文化会館特別会議室

3 出席委員

加藤修委員（座長）、鈴木通大委員（副座長）、飯田重行委員、影山美佐子委員、
椎名喜予委員、鈴木勲委員、橋本豊委員、安田一夫委員 以上 8 名

4 議事の概要

（1）第 2 次ちば文化振興計画の概要について

「資料 3」により事務局から説明。その後、意見交換。

【委員】

振興計画は良くできていると思う。過去 3 年間の総括を聞いた時に、「このような計画を立て、こういうことやりますと記載しているが、統計的に数字をみると思ったより効果があがっていない」との説明があった。統計の取り方にも問題もあるかと思うが、それらを踏まえて、何を変えてどのように取り組んでいくのかを聞かせてほしい。

【事務局】

統計的な数値の取り方に問題があったのではというご指摘は、本計画を作る段階でも話があった。今回は県だけではなく、千葉県全体でどれくらいの入館者数があったかなど、県全体でどのように文化振興が図られたかを見ていけるような指標に改めた。P19 で指標にしている入館者数は、従来は県立だけであったが、市町村立も含めることとした。併せて「学校における文化芸術活動の取組事例」についても、数値だけでなく、アンケートをとるなどによって、定性的評価を加えることとした。

【座長】

アンケートの指標についても十分に工夫してほしい。

【委員】

千葉県は、計画の実施主体である部分もあるが、どちらかといえば県全体のプロモーターという位置づけだと思う。

文化交流ボックスはよくできているが、アンケート結果をみると文化芸術団体の認知率は 50%で、もうひとつでは 70%が知らなかったと回答している。「チーバくん」をみんなが知っているように、「文化交流ボックス」を 3 文字くらいの簡単な言葉でプロモートしたり、そこに行けば文化のことがわかるサイトにするなど、県として働きかけをするべきである。

ある企業のホームページは全国の催し物を紹介している。文化交流ボックスも同様に、一般の美術館・博物館、ギャラリーに飛んでいけるようにしてほしい。

構成はよくできているので、それを末端までどうやってリンクさせていくかを考えていくとよいと思う。

(2) 平成28年度実施計画・進行管理について

「資料4」により事務局から説明。その後、意見交換。

【委員】

文化会館に来たことのない人にどのように来てもらうか、若い人たちにどのようにアプローチしていくのが課題だと思っている。皆様の意見を聞きたい。

【委員】

はじめてくる人を呼び込むには、いろいろなものを提供して、食いついてもらうとよいのではないか。若い人を取り込もうとすると、高齢者の支持が得られない。これをどうするかも課題である。また、新規顧客だけでなく、リピーターへの対応についても、取り組まなければならない。具体策は難しいが、新しいことや魅力のあることに取り組むとよいと思う。魅力も年代によって多様である。新たなアイデアをどうやって県民に提供できるかが課題である。いろいろな分野の方から意見を聞きたい。民俗芸能では、観光側の人に応援してもらわないと、うまくいかないので、行政の縦割りを排除して、コラボしていきたい。

【委員】

若い人をどうやって取り込んでいくかということだが、学校では、地域連携やボランティアの推進などに取り組んでいる。子供たちに企画させると、子供たちには子供たちの独特な視点があり、また一度火がつくと、どんどん進んでいく。子供たちのアイデアで企画させることが大切である。例えば、部活で定期演奏会など、自分たちで企画するが、そうすると達成感があり、ノウハウが後輩に脈々と受け継がれていく。

【座長】

自分で生計を立てている若者も含めた若い世代にも目を向けさせるとき、経済的側面も含めていろいろな問題がある。厳しい生活状況にある若者も、自ら企画提案し、成功させることで達成感が得られると思う。そのようなきっかけを提案していけるといい。

【委員】

去年から「まちぐるみ小劇場」ということで、まちぐるみで暮らしの中の文化を楽しみながら学ぼうという事業を始めた。地元の小中学校には郷土芸能部があるので、その発表をする。市内の3つの高校には、場所は提供するので企画してほしいと話したところ、快く受けてくれて、書道のパフォーマンスや、茶道、演劇などに取り組んでくれた。

2年目になって、参加も増えて、県民芸術劇場も地元の中学校・高校と共演する企画として、いろいろな年齢層のいろいろな立場の方に参加してもらおう「江戸優り佐原・文化芸術祭」として取り組んでいる。子供たちには、自分の街は、こんなにいい街なんだと認識して、大きくなってほしい。

佐原囃子は3流派あるが、流派ごとに息継ぎなども異なる。新たな佐原囃子文化圏の掘り起こしへの取り組みとして佐原囃子だけの演奏を提案したところ、佐原囃子の演奏をしている若者がいろいろな形で参加してくれるとのことだった。こちらで概ねの柱だけ立て、どうするかたちで参加するか考えてくれる形が少しずつできてきている。地域の中から文化が全体に広がっていくと良い。

文化振興計画の中でいろいろな実績を収集するというが、文化というと教育委員会所管が多いが、観光分野で文化を使っていることも多いので、いろいろなところから情報を収集してほしい。特に、市民活動団体をサポートしている市町村セクションから情報を吸い上げるともう少しいろいろな事例が集まるのではないかな。

【委員】

文化・芸術はわかりにくいと思う部分もあったが、日々生活していることそのものが文化と考えると身近なことと思う。仕事柄、世界的な歴史的建造物や美術館、博物館を見たり、聞いたりした経験が多いが、今の若者はバーチャルの世界が発達していて、本物を見たいとか、これはここに行かないと食べられないとか、本物に関心を持っていないような気がする。バーチャルな世界の中で、自分が経験したように思うてしまうことが多いのではないかな。現場にいき、現場にいった感動を伝えたほうがよく伝わる。オリンピックも現場で見れば、映像の5倍10倍感動すると思う。ちばの文化芸術を発信するというのであれば、「徹底的に現場を見て、感じるものを得てください」というのが、特に若者に訴求するのではないかな。

リピーターという話があったが、ビジネスの世界ではリピーターを大切にしていかなないとビジネスは成り立たない。リピーターは顧客の7~8割を占めるが、新規顧客は1~2割でしかない。それで対前年比百何%の割合で売り上げを伸ばしていくというのがビジネスの世界。行政の計画や事業は、ファーストアプローチ（入口の機会）の仕組みを作り、民間事業者はリピーター化を図る具体的なことをやっていくのがよいと思う。千葉市を訪問したお客様にいかに面白い街で美味しいものがある街だということを示すのが民間の役目だと思う。それぞれの役割を広げていった方がいいような気がする。博物館・美術館で、学芸員に作品の背景やストーリーを説明してもらうことで、リピーターにつながるのではないかなと思う。

行政の役割としては多岐にわたってしまうのは仕方がないが、優先順位をつけたり、年齢層にわけるとか強弱や特色をつけていったほうがわかりやすくなると思う。対象を絞らないと砂漠に水をまいているようで5年たっても10年たっても芽がでないだろう。

【座長】

県として千葉県の魅力が何であるのか、骨格を示し、リードすることを願う。

【委員】

計画の 38～39 ページは、先ほどの発言に非常に関連する資料で、県民の方々の意識が見える。過去 1 年間にふれた芸術は「映画、漫画、アニメ」となっており、これが一つ象徴している。また、40 ページの「この 1 年間に県内の文化芸術に触れなかった理由」のうち「家庭などでテレビ、DVD などのメディアで鑑賞しているから」という理由が結構なパーセンテージを占めている。疑似体験で満足してしまうというのは結構あると思う。

県として、ここが求める姿だというのがあって、そのために計画のうちのどのあたりをプッシュしようか、というのはあっていいと思う。

【座長】

バーチャル感覚には大いなる問題があると思う。しかし、それは我々世代の責任でもある。たとえば美術作品の鑑賞にしても、現物を見ていないのに、あたかも見たような気になっている人も少なくない。そういう学生が親になり、教師になり、現物を軽視する感覚を次世代に伝えてしまうといった悪循環はすごく怖いことだと思う。

【委員】

行政の施策なので総花的になるのは仕方のないことだが、予算も限られている中、ひとつのキーワードは連携だと思う。市町村や各地域でいろいろな文化行事をやっているが、それを我々はなかなかキャッチできないので、市町村との連携を県がコーディネートしないといけない。私が属している協議会の上部団体である芸術文化団体協議会は、県域団体と市町村域団体があるが、千葉市が加入していないので、千葉市の情報が入ってこない。県が積極的にコーディネートしないと情報の共有化ができず、十分な効果が発揮できないと思う。そういう面で県がやれることはまだまだあるのではないか。

もう一つは学校教育とどう連携していくかが課題である。音楽鑑賞教室は、開催するだけでなく、学校教育と関連付けることが必要である。音楽の授業のどの部分と関連付けるか、担当の先生と事前に打ち合わせし、終わった後、どう学校教育に活かしていくのかを突き詰めていかなければならない。音楽鑑賞教室は一例だが、連携がキーワードになると思っている。

【委員】

県は何をしなければならないのかを考えると、ファーストアプローチというか、プロモーター、機会の提供をすることが県の役目であると思う。

小さいときに美術館に来たお客様が感銘を受けたと言って再度来るという例もある。そのような機会を提供するのが行政ではないか。小中学校の鑑賞教室は、先生が

変わるといっぺんにレベルが代わる。教育という場面で美術や文化的なものに触れられる機会を提供する、そのあたりの仕掛けを作らないと底辺が広がらない。

(3) オリンピック・パラリンピックの文化プログラムについて

(4) 東京 2020 大会に向けた文化振興の取組について

「資料 5, 6, 7」により事務局から説明。その後、意見交換。

【座長】

ぜひ具体的なところで、これをやったというようなものを作りたい。第 1 期としてはもう動いているのか。

【事務局】

参画プログラムは、8 月 15 日から申請を受け付けている。今年度は、資料 5 の最終ページにある<フェーズ I>キックオフ期間にあたり、東京 2020 公認プログラムのみ開始となっている。対象となるのは、千葉県内では、主催者・事業主体が千葉県、千葉市、スポンサー企業である事業に限定される。

【座長】

たとえば、ここにいる方たちがそのコミュニティを作って参加したいといった場合は含まないのか。

【事務局】

県と共催の場合は可能だろう。ただし、実行委員会形式でやる場合も、スポンサー以外の企業は名前を出せないのが、難しいのではないかと聞いているが、詳細は不明である。

【委員】

スポンサー企業から組織委員会に協賛金を払っており、企業に対しては、協賛金を払っていないところは参加させないとはっきり言っている。最初は開催県、開催市だけが対象として、ぎゅっと絞られてしまっている。徐々に 2020 年までに緩めて行く感じになるのではないかと。

【委員】

例えば、近隣美術館 5 館（千葉市美術館、県立美術館、DIC 川村美術館、成田、佐倉）という団体で、千葉県が共催で一緒にやる場合は公認される可能性があるのか。

【事務局】

可能性はあるが、DIC 川村美術館という名前を出すのは難しい。企業名を出したいときは、内閣府が進める beyond2020 でということになるだろう。

【委員】

beyond2020 は県が認定する可能性があるとのことだが、いつ頃決まるのか。

【事務局】

県に認定権限を下ろすだろうとは言われているが、時期は不明である。

【座長】

オリンピックのために動いているわけではなく、オリンピックを用いながら骨太な何かを残したいものだ。どんなものを残すかといったビジョンはどこで決まってくるのか。

【事務局】

先ほどから話が出ている「連携」がまさにそこなのかと考えている。色々な分野の方と連携していく中で、そこに残したいものが出てくるものと考えている。

ロンドン五輪では、資産として残ったものは横の繋がりで、それが一番大きなものだ、参加した方が言っていると聞いた。あくまで行政ができるのは側面支援なので、場を作ること、機会を提供することはできても、そこから先をこのように歩きなさいということとはできない。千葉の文化は新しい文化と古い文化が繋がってできている文化であり、創造性・多様性があるので、そのような文化を2次的3次的に波及して、よりよい千葉県、光り輝く千葉県にできたらと考えている。

【委員】

ロンドンが、久しぶりに多くの文化イベントを開催して、特にパラリンピックにスポットが当たり、フォーカスされていったことは、大きな意義のあることであったと思う。文化イベントを通じて地域を活性化するのが最大の目的なので、この機会を通じて地域の活性化を目指すために色々と発信していくことが大切である。いきなり何をやろうかということは難しいので、ロンドンでどんなことをやったのかということに勉強したうえで、そこから議論した方がいいのではないかな。

【事務局】

いただいた意見は持ち帰り、千葉県の文化振興施策、また、オリンピック・パラリンピックの文化プログラムに繋げていきたい。

(5) その他

【事務局】

ロンドンの文化プログラムについては、当懇談会委員のブリティッシュ・カウンシルの芸術部長が詳しいので、機会をとらえて情報提供してもらいたいと思う。